

# 7世紀における 地域拠点の形成過程

## 東海地方を中心として

Formation Process of Local Bases in the 7<sup>th</sup> Century :  
With a Focus on the Tokai Region

鈴木一有

SUZUKI Kazunao

はじめに

①東海における前方後円墳の終焉と古墳の終末

②古代寺院の造営と地域社会

③地域拠点の設定と境界の認識

結語

### 【論文要旨】

分析対象として東海地方を取り上げ、有力古墳の推移からみた古墳時代の首長系譜と、7世紀後半に建立された古代寺院、および、国、評、五十戸・里といった古代地方行政区分との関係の整理を通じて、地域拠点の推移を概観した。古墳や古代寺院の造営から描き出せる有力階層の影響範囲と、令制下の古代地方行政区分については、概ね一致する場合が多いとみてよいが、部分的に不整合をみせる地域もあり、7世紀における地域再編の経緯がうかがえた。

大型前方後円墳など、盟主的な首長墓が影響力を発揮した範囲と、7世紀中葉から後葉に構築された中核的な古代寺院の分布は、国造がかかわった領域と比較的良好に対応するものの、令制下の国や郡の領域とは必ずしも一致しない。また、7世紀代に構築された終末期古墳については、地域差や個性が顕著なことから、網羅的に地域秩序を復元する資料として用いることが難しいことを示した。

令制下の行政区分への編成は、古代官道の整備や領域設定ともかわり、7世紀後半の中で段階的に進んだ。その大きな画期は、孝徳朝における前期評の成立と、天武12年(683)～14年(685)に断行された国境策定事業と連動した後期評への移行であり、後者によって古墳時代的な地域秩序の多くが否定され、領域にかかわる地域再編が大きく促されたと想定した。

【キーワード】 前方後円墳、終末期古墳、古代寺院、評家、国府

## はじめに

推古天皇<sup>(1)</sup>の即位(592年)から平城遷都(710年)に至る、概ね7世紀を中心とする一世紀は、日本列島における政治拠点の名をとって、「飛鳥時代」と呼ばれる。この時代は、考古学による文化史的な時代名称として「古墳時代終末期」と呼ばれることも多いが、その場合は、前方後円墳の消滅をもって古墳時代後期と分離する考え方が一般的である。また、飛鳥文化と天平文化の中間に位置する文化を「白鳳文化」とし、その時代相を有する美術様式として「白鳳様式」とする認識も広く受け入れられている。白鳳様式の中心的な年代は7世紀の後半であるが、根幹となる標識資料の評価が不安定なこともあり、年代区分としてはやや明確性に欠ける。しかし、飛鳥、白鳳という様式区分は、7世紀代の重要な考古資料である古代瓦の編年研究上、欠くことができない概念である〔奈良国立博物館1970〕。

研究主題とする史資料によって、それぞれ異なる時代名称を用いることが象徴しているように、日本列島の7世紀像には曖昧な部分が多く残されている。当時の政治的中心であった飛鳥を始めとする近畿地方中枢部の動向が、日本列島各地の地域相に大きな影響を与えていることは間違いない。しかし、検討素材が豊富な宮都やその周辺地域と同列の分析視点をもって、資料が限られる地域の様相を解きほぐすことは困難といわざるを得ない。

地域における7世紀史を語る上では、資料的に充実している古墳を分析材料に、首長墓の変遷や古墳の終末を検討する作業が不可欠であり、各地において個性的な終末期古墳の実相が明らかになっている。また、古代瓦の編年と遺構としての伽藍構造の研究をふまえ、古代寺院の出現過程とその後の推移を考究することも各地域で精力的に進められている。いっぽう、7世紀後半代に整備された地方行政単位である国、評、五十戸・里(サト)といった区分や、それを体現する官衙遺跡や集落、条里遺構についても、個別の分析が深められている。とくに7世紀の地方行政単位としての評は、孝徳朝全面立評説に依拠した上で、人的集団の集合体としての性格が強い前期評と、より領域志向が強い後期評に分けられることが明らかにされつつある〔山中1994〕。その移行期は天武12年(683)～14年(685)に断行された国境策定事業とも、おおよそ重なるものと想定できる。7世紀代の地方出土の木簡も着実に出土例を増しており、首長居館的な性格が強い前期評家から、地方統治拠点としての後期評家にいたる過程についても考古学的な検討が深められている。

7世紀代の評と8世紀以降の郡では、その区域、領域概念や地域内の諸制度に違いがあるものの、考古資料を用いる限り、評の区域を網羅的に把握することは極めて困難である。広域に地方行政区分を捉えるためには、史料が充実している令制下の郡の情報をもとに、評の実態を類推する方法が有効であろう。また、7世紀における地方区分の問題を考えるにあたっては、古代史で検討が深められている国造制の問題についても注意を払う必要がある。

本稿では、こうした資料相互がもつ問題点を踏まえ、7世紀における地域史を多角的に読み解く基礎作業として、地方における有力古墳の動向と、古代寺院の推移、および古代地方行政単位の成立と展開について検討を加えてみたい。分析対象には、現在の三重県、岐阜県、愛知県、静岡県を中心とする東海地方をとり上げる。令制下における国の区分としては、伊勢、志摩、美濃、尾張、三河、遠江、駿河、伊豆の各地域に相当する(図1)。

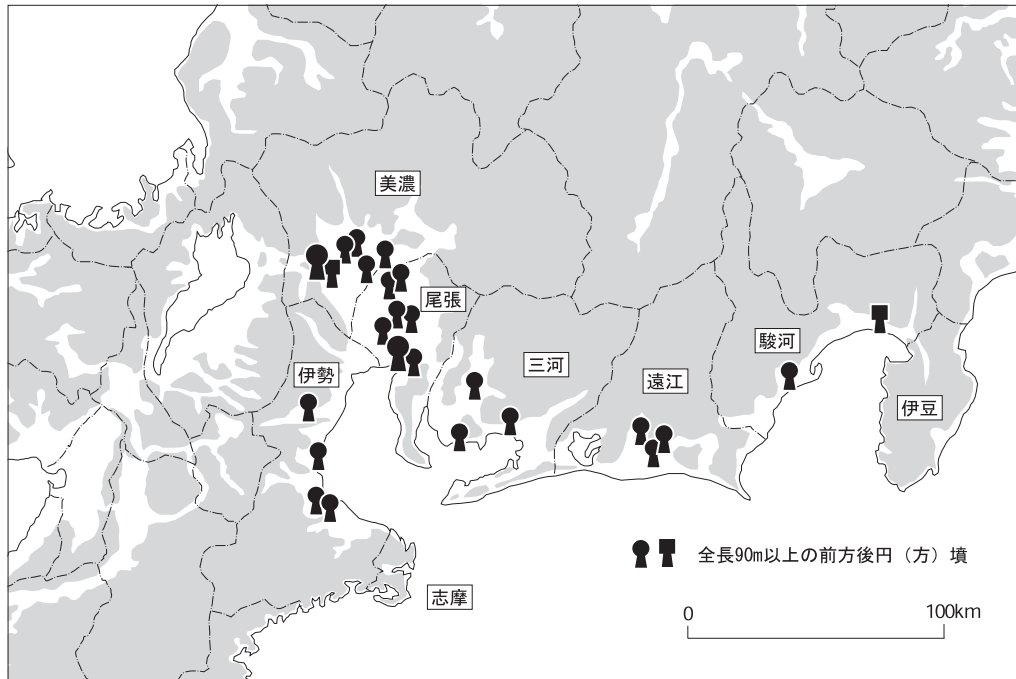


図1 東海地方の概観

## ①……………東海における前方後円墳の終焉と古墳の終末

各地における前方後円墳などの有力古墳を築造時期ごとに並べ、有力階層の動向をあとづける「首長系譜論」は、1980年代以降、地域を横並びにして、年代の推移を縦方向に示す古墳編年図の提示によって検討が進められた〔石野ほか1985〕。この手法は、東海各地の事例研究においても数多く用いられ、現在もその精度をあげる作業が続けられている〔近藤編1992、中井・鈴木2011、瀬川2012〕。

図2～6に東海地方各地における有力古墳の変遷を示す。各図には、それぞれ古代寺院と古代地方行政単位との対応も示しているが、その詳細については後の記述の中でとりあげたい。ここでは、東海地方における古墳時代の首長系譜の特徴について触れておこう。

地域拠点とのかかわりの中で留意したいのは、東海地方においては、前期から中、後期を通じて安定的に首長系譜がたどれる地域が極めて少ないことである。前期、中期、後期といった各小期を中心にして、古墳の造営が盛んな地域と少ない地域の入替わりが認められ、首長権もしくは墓域の移動があった可能性が指摘できる。また、大型前方後円（方）墳の消長に注目すると、古墳時代前期から中期においては、概ね全長90m～100m程度以上の墳丘規模をもつ古墳が散在的に分布していることに気づく。本稿では、全長90m以上の前・中古墳を大型前方後円（方）墳と位置づけ、盟主的首長墓と呼んでおきたい。盟主的首長墓は、令制下の国を2～3分割した地域ごとに分布が認められる。これらの分布域は概ね大規模河川の流域や潟湖沿岸地域に対応し、自然地形に反映された自生的な地域拠点の醸成過程をうかがうことができるだろう。盟主的首長墓の分布からは、自然地形に制約された地域ごとに緩やかにまとまる5世紀以前の地域区分の実態を知ることができる。

盟主的首長墓から抽出できる地域の中には、より小さな範囲に影響力を発揮した首長系譜が複数系列みられる場合が多い。南伊勢の櫛田川流域をはじめ、東尾張の庄内川左岸域、西遠江の都田川流域、東遠江の原野谷川流域などが典型例であり、これらの地域では、おおむね全長50m～60m程度の規模の前方後円（方）墳が累代的に構築されている。その中のひとつ都田川流域は、他地域との隔絶性が自然地形から明らかであり、令制下の「引佐郡」に重なることが確認できる点が目に見える。引佐郡の中には四つの郷があったことが『和名類聚抄』の記載から明らかにされている。4郷程度からなる一つの郡に影響力を発揮するような前・中期古墳は、都田川流域に構築された首長墓の規模、すなわち全長50m程度であることがうかがえよう。以下、本稿では、全長40m～80m級の前・中期古墳を中型前方後円（方）墳とし、盟主的首長の下位に連なる被葬者が想定できる中間的首長墓と呼んでおきたい。

階層的な差は墳丘規模から明確であるが、盟主的首長墓と中間的首長墓の被葬者の間には、制度的な上下関係があったかは定かではない。古墳に樹立された埴輪や堅穴系埋葬施設などの特徴には緩やかな階層構造が抽出できるものの、盟主的首長墓の様相が広い範囲に絶対的な影響力を行使したかは疑わしい。古墳時代においては、地域拠点ごとに階層差がみられるものの、相互の関係は重層的で、古墳の諸属性からうかがえる倭王権との関係の強弱もそれぞれの古墳で大きく異なる場合がある。4・5世紀における首長層の関係は、人的繋がりに依拠したもので、制度的な上下関係は形成されていなかったものとみてよいだろう。

このような地域間関係は、部分的な変質があったにせよ、前方後円墳の築造が停止する6世紀まで維持され続けたとみてよいだろう。東海地方では、6世紀になると相対的に古墳の墳丘規模が縮小するので、盟主的首長墓の規模も全長50m級程度まで下げて捉える必要があるが、前・中期的な階層構造は十分に読み取ることができる。こうした点をふまえると、墳丘規模から地域勢力の階層差や消長がうかがいにくくなる前方後円墳の消滅が、地域間関係が転換する大きな画期をなす可能性が高いとみてよいだろう。

東海地方における前方後円墳の終焉を瞥見しておきたい。図からも明らかなように、東海地方においては、6世紀の中頃（TK10型式期～TK43型式期）において、前方後円墳の築造が終了している地域が多い。北・中伊勢をはじめ、西美濃や尾張、西・中駿河などがその代表的地域といえる。中には西三河や東遠江、東駿河のように、6世紀前半の比較的早い段階（MT15型式期～TK10型式期）で前方後円墳の築造が終わる地域もある。6世紀に爆発的な数の前方後円墳が築造される関東地域と比べると、東海地方の多くでは早い段階で前方後円墳の築造が終了しているといえるだろう。

いっぽう、東海地方においても、6世紀後半（TK43型式～TK209型式期）まで比較的規模の大きい前方後円墳が構築される地域もある。東美濃の木曾川北岸地域（各務原市域）と東三河の豊川東岸地域（豊橋市域）が典型例であり、それぞれ個性的な前方後円墳が築造されている。この地域に構築された岐阜県大牧古墳群〔渡辺2000・2003〕や愛知県馬越長火塚古墳群〔岩原編2012〕をとりあげ、東海地方における前方後円墳築造の終末の様相について触れておきたい（図7）。これらの古墳群にみられる前方後円墳は独自性が強い墳形を採用するものが多く、葺石の技法や横穴式石室の形態にも強い地域性が看取できる。葺石や横穴式石室の特徴は、前方後円墳築造停止後の大型円墳や方墳にも引き継がれており、墳形の変化を超えた共通性が各地で貫かれている。



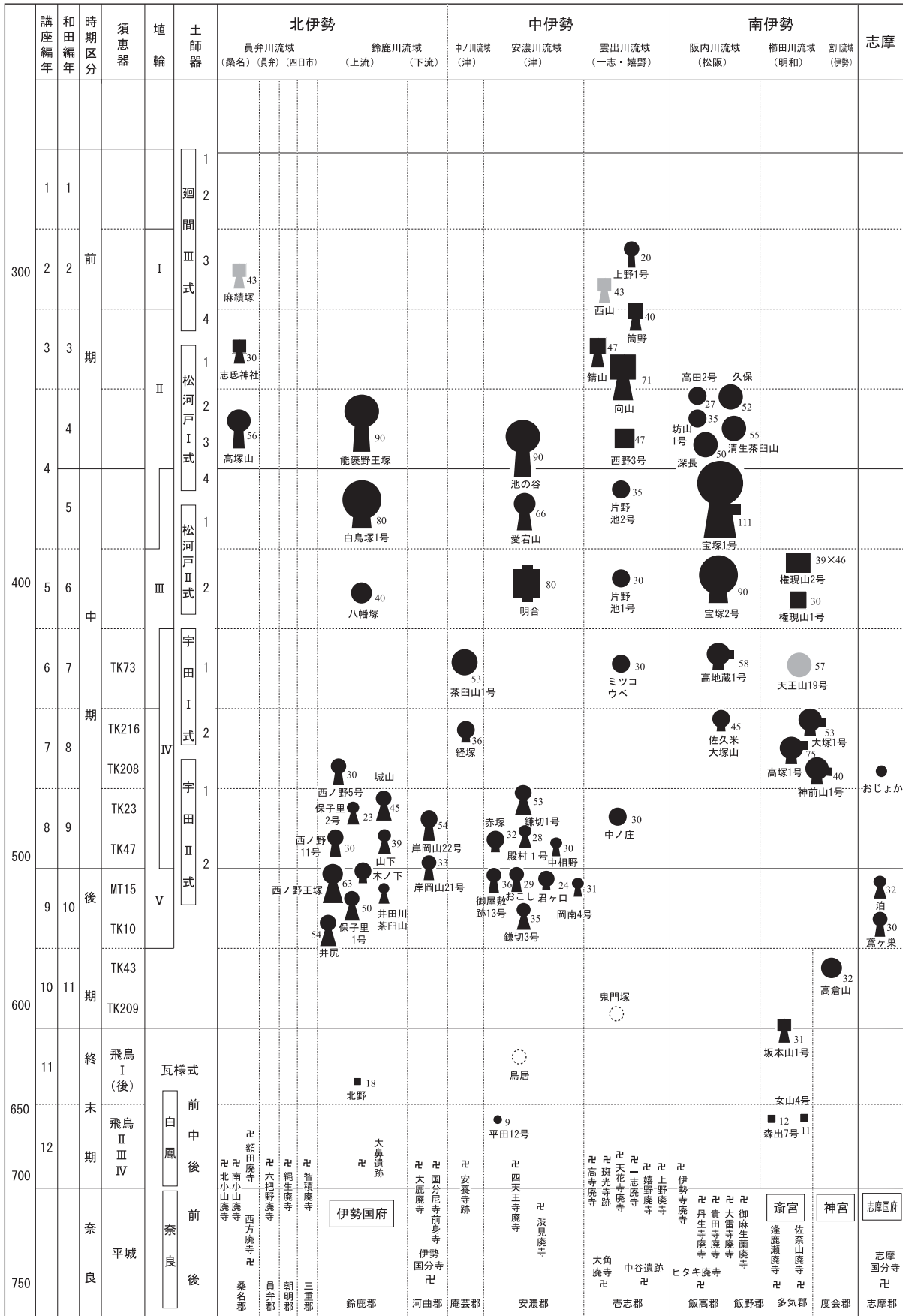


図2 伊勢・志摩における古墳の変遷と古代寺院

編年・埴形に根拠が弱い古墳

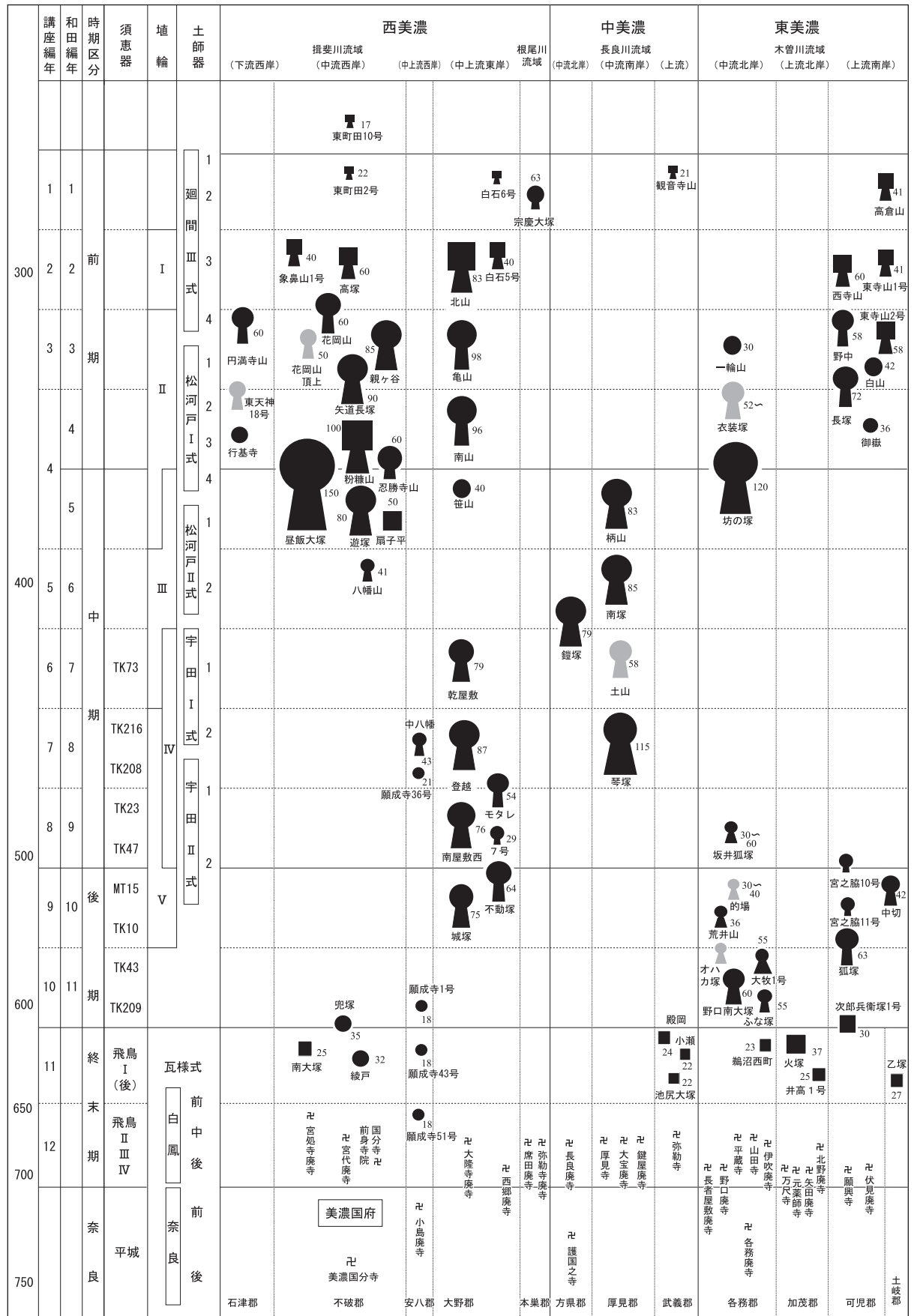


図3 美濃における古墳の変遷と古代寺院

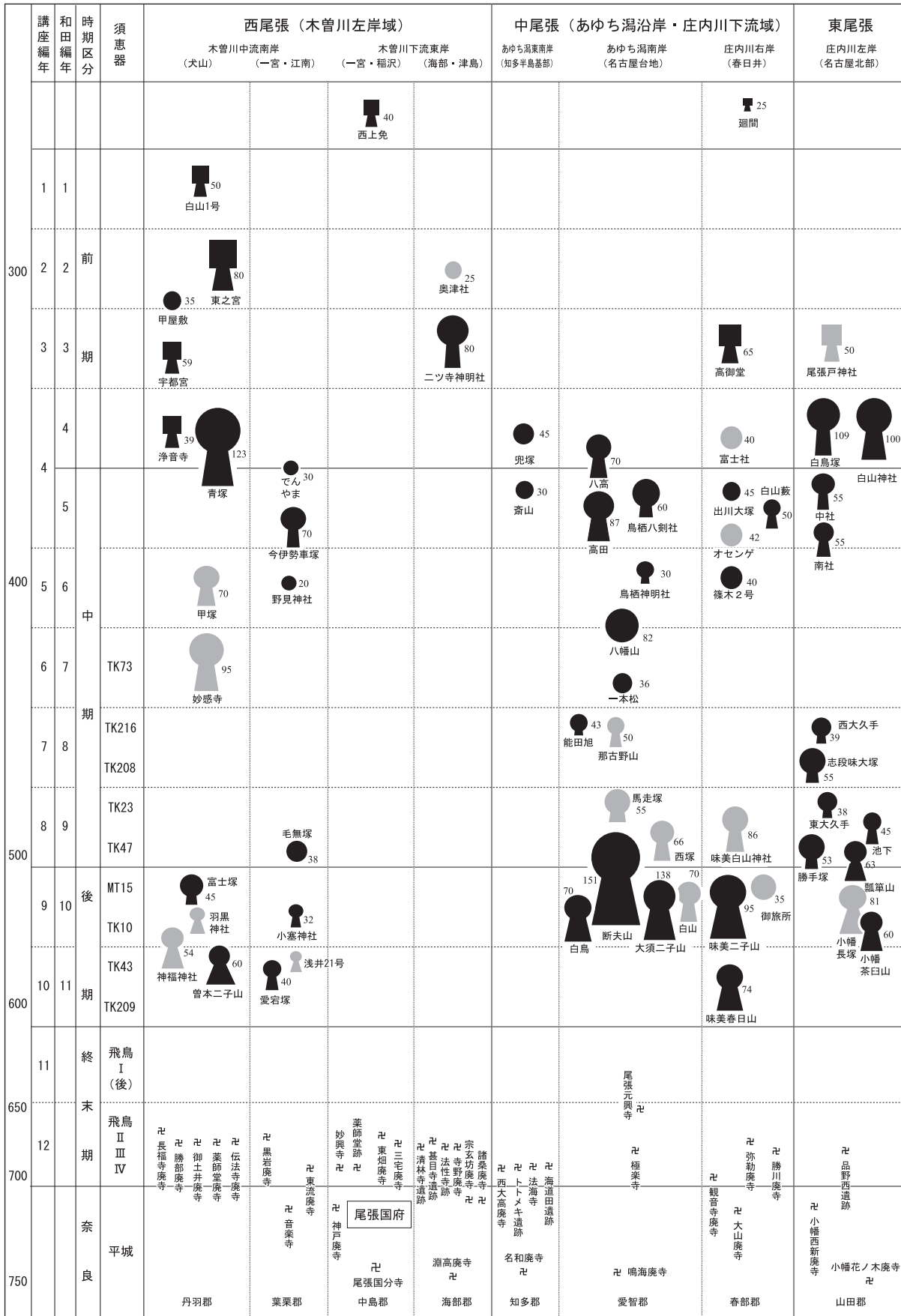


図4 尾張における古墳の変遷と古代寺院

● 編年・墳形に根拠が弱い古墳

講座 編年	和田 編年	時期 区分	須 恵 器	埴 輪	土 師 器	西三河 (矢作川流域)				東三河 (豊川流域)				西遠江 (都田川・天竜川流域)							
						上流 (豊田)	中流西岸 (安城)	中流東岸 (岡崎)	下流 (幡豆)	下流西岸 (豊川)	中流西岸 (一宮)	中流東岸 (北豊橋)	下流東岸 (南豊橋)	都田川流域 (湖西・引佐)	天竜川南西岸 (浜松)	天竜川北西岸 (浜北)	天竜川東岸 (天竜・豊田)				
300	1	1				1															
						2															
						2	2	前	I	3											
										4											
						3	3	期	II	1											
										2											
						4	4			3											
										4											
						4	5			1											
										2											
						400	5	6				1									
2																					
6	7	中	III	1																	
				2																	
7	8	期	IV	1																	
				2																	
8	9			1																	
				2																	
9	10	後	V	1																	
				2																	
10	11	期		1																	
				2																	
650	11	終	飛鳥 I (後)	瓦様式	1																
					2																
					3																
700	12	末	飛鳥 II III IV	白鳳	1																
					2																
750		奈良	平城	奈良	1																
					2																

図5 三河・西遠江における古墳の変遷と古代寺院



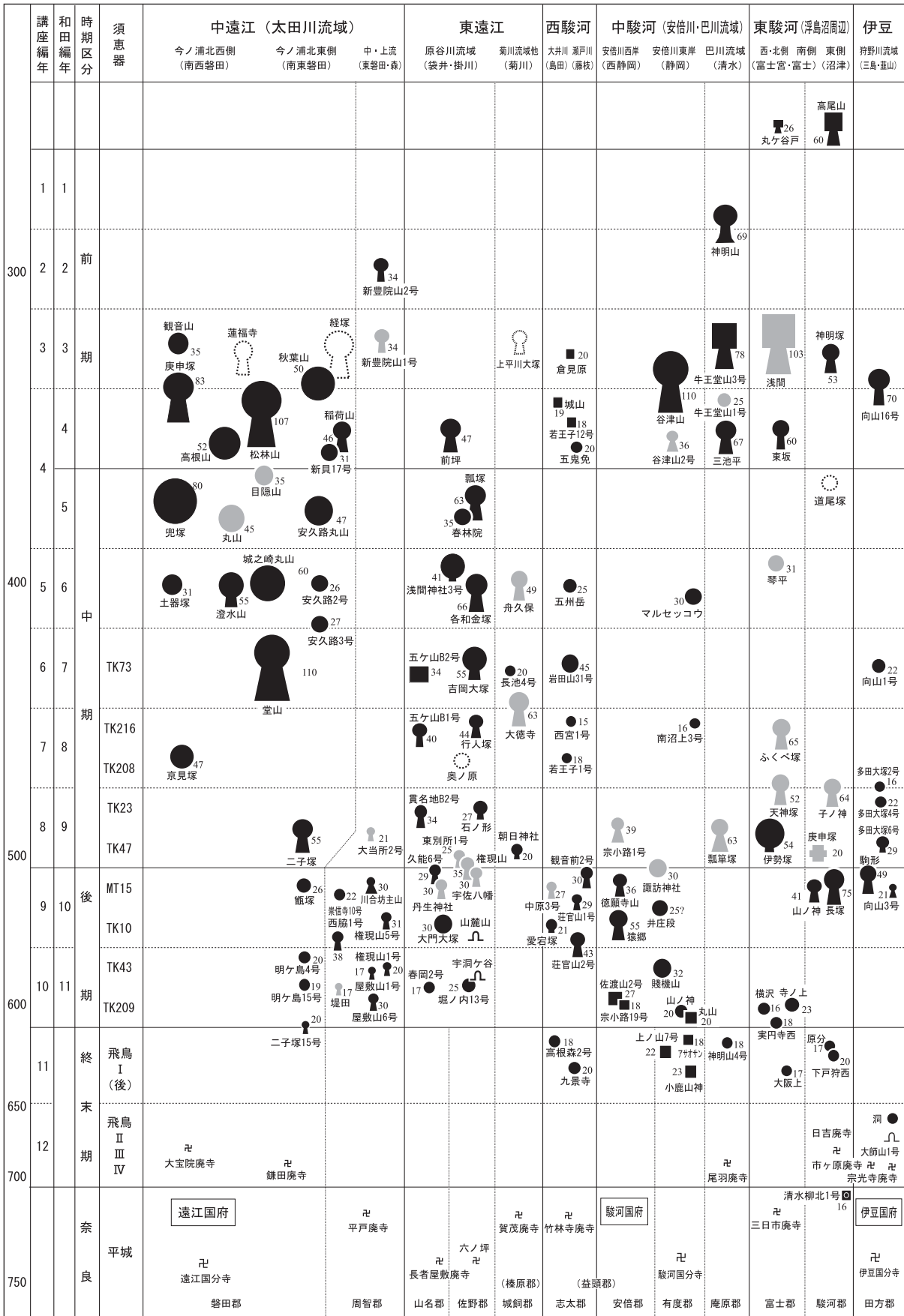


図6 東遠江・駿河・伊豆における古墳の変遷と古代寺院

● 編年根拠が  
乏しい古墳

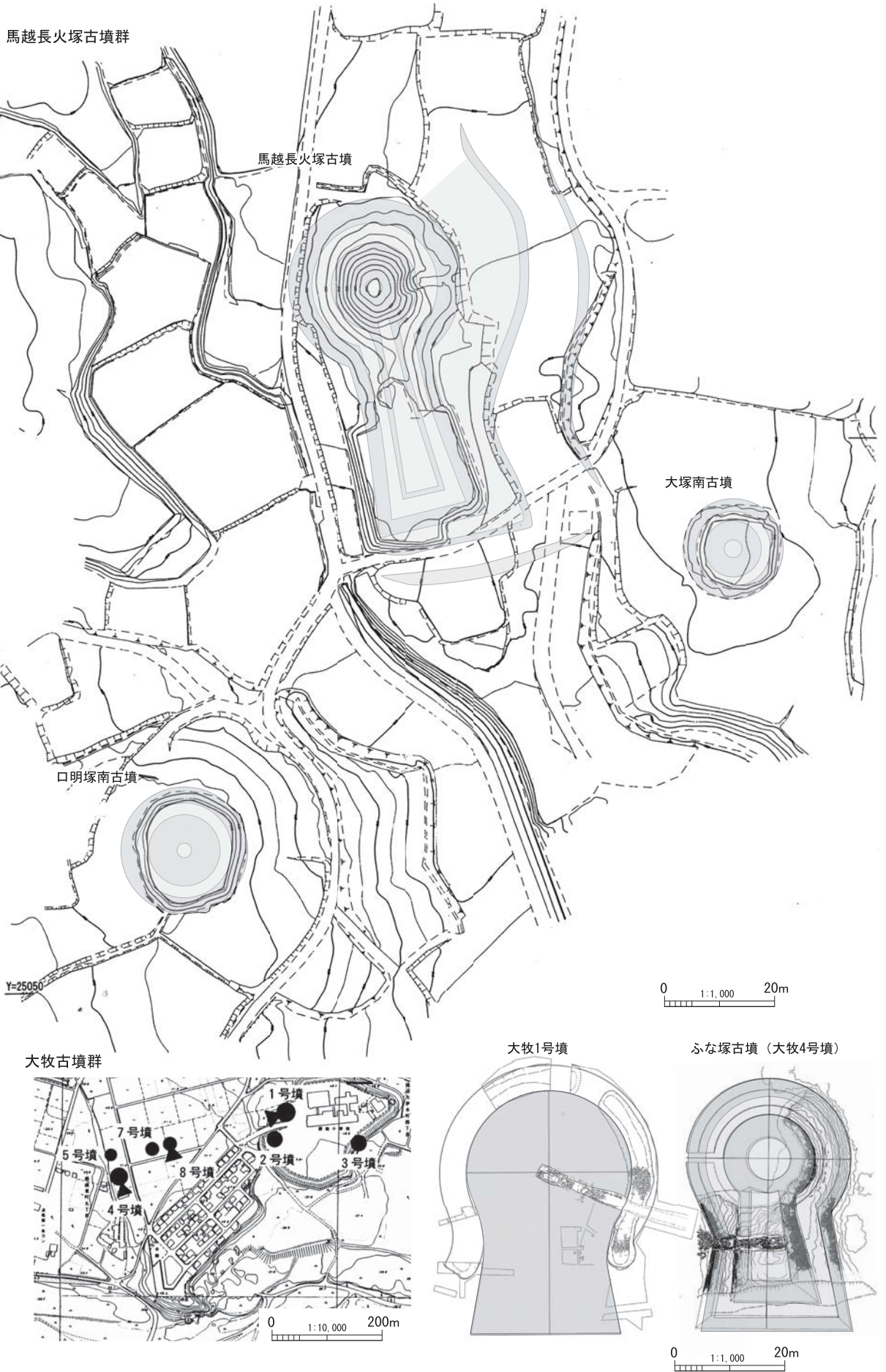


図7 東海地方における最終末の前方後円墳

近年、その様相が明確になった馬越長火塚古墳群は、前方後円墳の築造終了後に墳形が円墳に変化していることでも注目に値する。6世紀後半の前方後円墳である馬越長火塚古墳の近接地には、大塚南古墳、口明塚南古墳といった円墳が築かれている。これら円墳は、前方後円墳である馬越長火塚古墳と関連性が高い立地環境にあること、築造時期が7世紀に降ること、葺石構築技法が馬越長火塚古墳と共通性が高いことなどから、前方後円墳を構築した有力階層の末裔の墳墓とみてよい。大塚南古墳の直径19m、口明塚南古墳の直径23mという墳丘規模は、後述するように東海地方における7世紀前半代の首長墓として標準的な大きさを示していると評価できる。

同様に7世紀における円墳を中心とした有力古墳の構築が顕著な地域として東駿河がある。この地域では、大型の無袖石室が発達し、実円寺西古墳や寺ノ上古墳のように、6世紀末から7世紀前半にかけて、玄室長10mを超えるような大型横穴式石室が構築されている。東駿河の黄瀬川左岸域に築造された原分古墳〔井鍋編2008〕や下土狩西古墳などの有力古墳を含む土狩五百塚古墳群も7世紀の有力階層が構築した古墳群である。大型の無袖石室の中には、剝拔式の家形石棺が入れられ、副葬品に豊富な装飾馬具や装飾大刀などをもつことなど、古墳被葬者の優位性が指摘できる。こうした東駿河の有力古墳の墳丘規模は直径20m前後である場合が多く、東駿河における7世紀の首長墓の標準的な大きさがうかがえる。

東海地方には、美濃や中駿河のように大型方墳の築造が顕著な地域もある（図8）。これらの地域では一辺が20mを超える大型方墳が数多くみられ、それぞれ地域性が顕著な大型横穴式石室が構築されている。こうした大型方墳の分布からは、7世紀前半代まで首長系譜を読み取ることができる。また、墳丘規模こそ小さいものの、伊勢や遠江でも7世紀代を中心に方墳が築かれている。ただし、先述した三河や東駿河をはじめ、尾張など、方墳の構築が少ない地域もある点は留意しておきたい。7世紀における方墳化、およびその墳丘の大型化は、地域的偏りが明確である。

こうした各地域における様相を比較すると、東海地方における7世紀代の古墳については、円墳にせよ、方墳にせよ、直径もしくは一辺が20m前後の規模をもって、首長墓として認識できる指標と捉えられる可能性がある。ただし、ここで指標値としてとりあげた直径もしくは一辺20m程度という墳丘規模は、あくまでも小地域内においてのみ有効な相対的な数値であることを留意しなくてはならない。伊勢や尾張、西三河では、この規模を超える7世紀代の古墳がほとんど存在しないので、有力階層が築いた古墳についての指標を別に捉える必要がある。階層差を示す墳丘規模の基準は各地域で相対的に異なると予想され、地域を超えた統一的数値を用いた比較は困難といわざるをえない。大型古墳の構築がみられない地域においては、20m以下の規模の古墳についても、首長墓として積極的に評価することが求められるだろう。

7世紀代の古墳が首長墓か否かを考える上での指標として、単独立地の傾向があるかどうかという視点も有効である。また、この視点とは全く正反対のことになるが、群集墳の中にも首長墓や首長墓級の古墳が含まれる可能性も考慮すべきである。この問題について一定の示唆がえられる事例として、岐阜県願成寺西墳之越古墳群をとりあげておこう〔横幕2002〕。この古墳群には、限定的な丘陵斜面上に総数100基程度の古墳が密集している（図9）。群中の古墳の殆どが6世紀末から7世紀にかけて構築された円墳であり、横穴式石室を埋葬施設としている。墳丘規模の比較から捉えると、直径18mほどの1号、43号、51号墳が古墳群の中心的な存在であり（図9にAランクとして



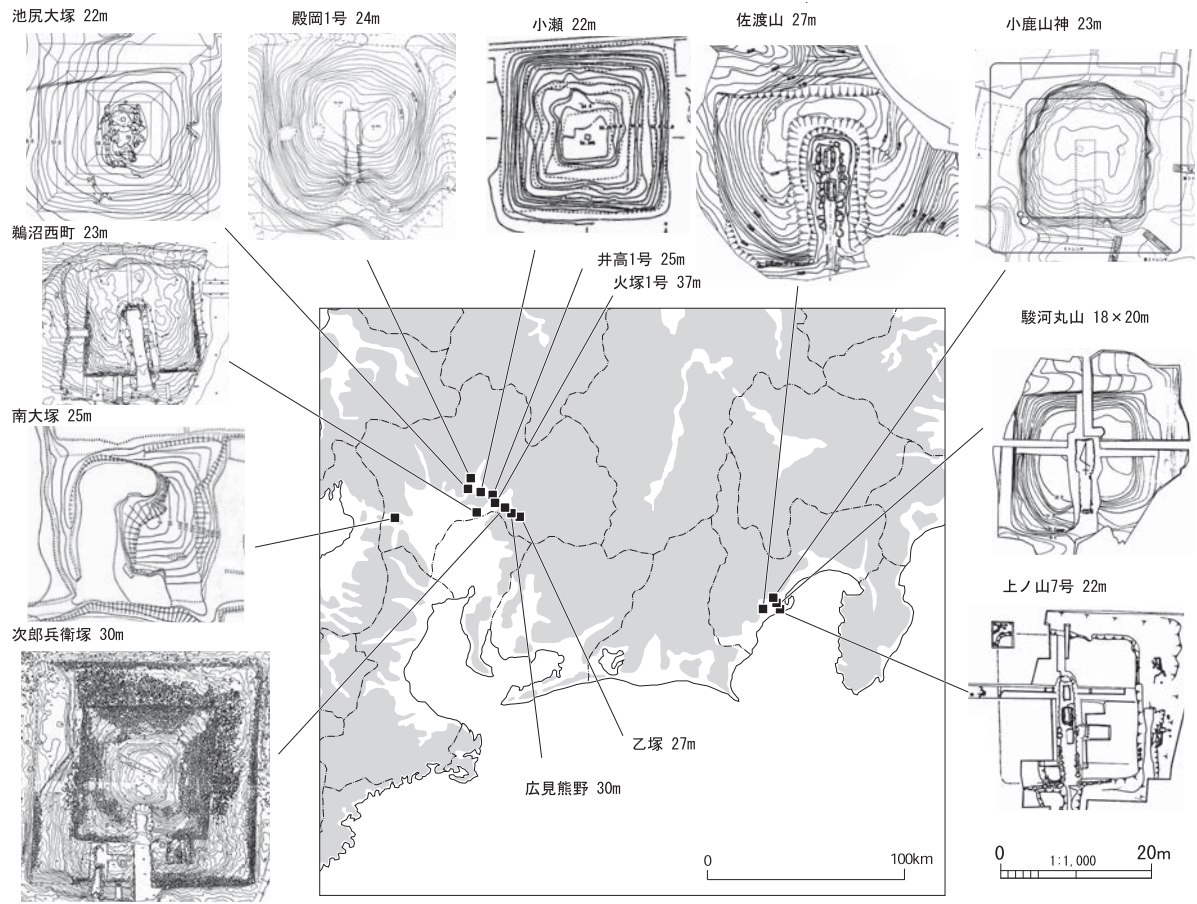


図8 東海地方における後・終末期の大型方墳

示す), 墳丘や横穴式石室の規模の点で周囲の古墳との隔絶性が著しい。群集墳造営の中心的勢力が6世紀末から7世紀中葉の数世代にわたり古墳の築造を継続し, 世代ごとに有力古墳を核としてその周辺に小型古墳を構築したものと捉えられる。願成寺西墳之越古墳群が構築される揖斐川中上流西岸地域には同時代の大型古墳は希薄であることから, 地域の最有力階層もこの群集墳中に古墳を築いたとみられる。

群集墳中に首長墓級の古墳が埋め込まれている可能性が高い事例として, 西遠江地域に所在する三方原古墳群についても検討しておきたい(図10)。三方原古墳群とは, 天竜川西岸地域の台地縁辺部の総延長6kmほどの地域に総数1000基ほどの古墳が密集して構築された古墳群の総称である。現在までに400基近い古墳が発掘調査され, その多くが6・7世紀に構築されたことが明確になっている[鈴木2000]。周辺には, 同時代の首長墓は知られず, 地域中の最有力階層が築いた古墳もこの大規模古墳群の中に含まれるとみてよい。その可能性が高い古墳群として宇藤坂A古墳群[鈴木編1998]があげられる。三方原古墳群の中央部に築かれた宇藤坂A古墳群は, 6世紀後半(TK43型式)に構築が開始され, その後, 7世紀を通じて, 古墳の築造と追葬が繰り返されている。後期後半に構築された宇藤坂A4~A6号墳は, 古墳の規模が周囲の古墳と比べ突出して大きいだけでなく, 副葬品や執行された儀礼の複雑度からみても, 地域の中での最有力階層が築いた古墳とみるに

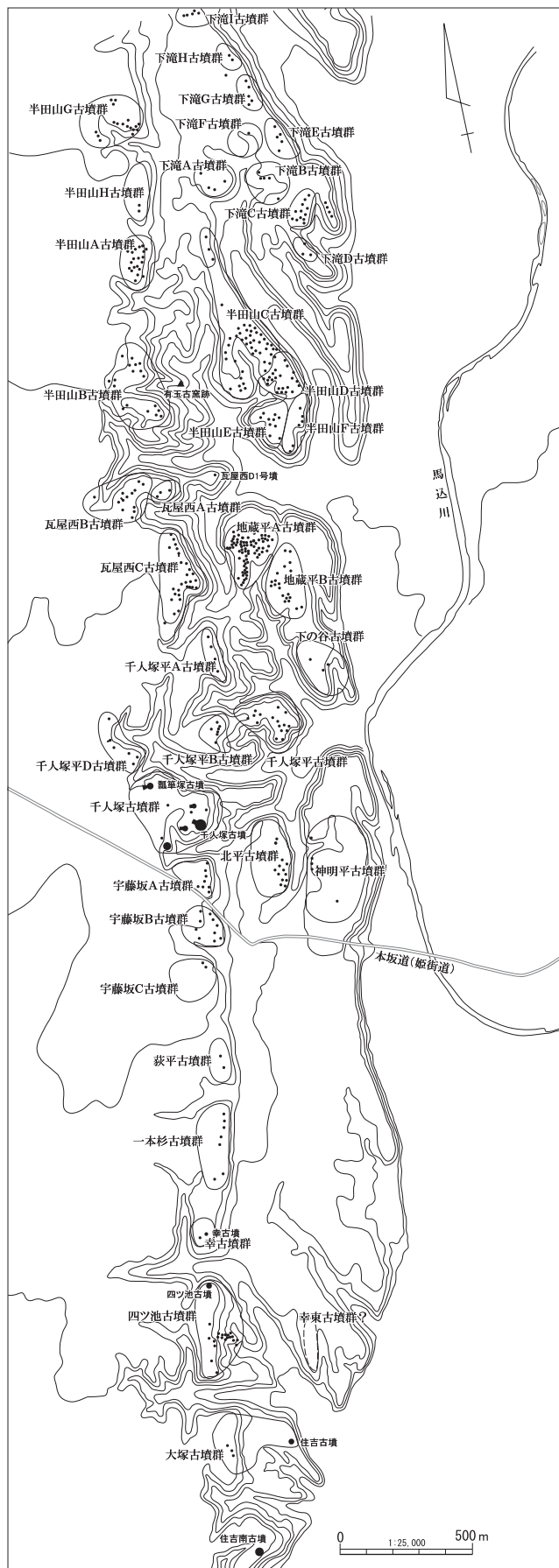




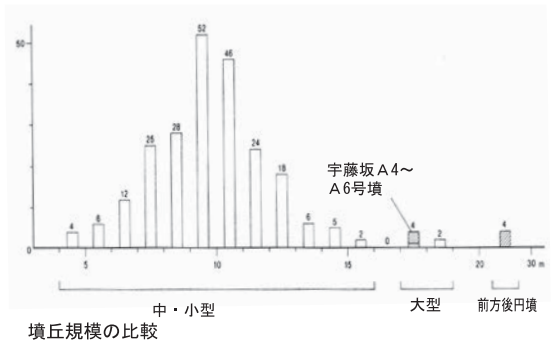
図9 願成寺西墳之越古墳群における階層構造

ふさわしい。いっぽう、この宇藤坂 A 古墳群では7世紀にも古墳造営が継続されるが、7世紀代に築かれた古墳は、墳丘規模や埋葬施設が縮小しており、他の古墳と比べて優位な属性を見出すことが困難である。三方原古墳群では、埋葬施設や墳丘規模、古墳副葬品などの情報から7世紀の古墳の階層性がうかがいにくいことをふまえると、宇藤坂 A 古墳群の中には、前代までの系譜を引く有力階層が構築した7世紀代の古墳が含まれると捉えても矛盾はない。この想定が正しいとすれば、一見、空白にみえる西遠江の7世紀代の有力階層の系譜は、等質的な群集墳の中に埋没しているとみてよいだろう。

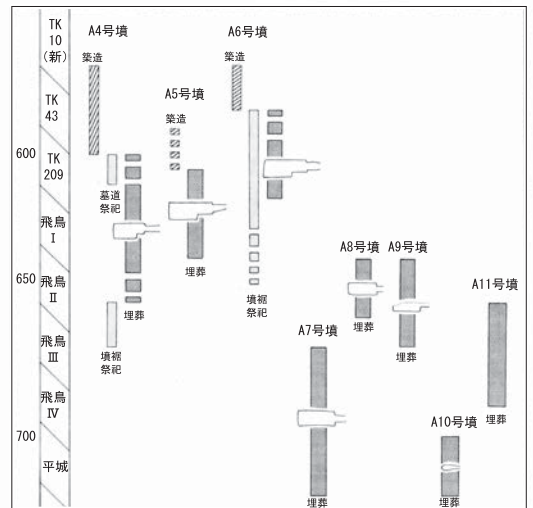
ただし、7世紀において、各地域の支配階層がすべて有力な古墳を構築したのかという問題意識も合わせて持ち備える必要である。西遠江の三方原台地南部とその南に広がる平野部一帯は、弥生時代以降、拠点的な集落が継続的に造営されるが、前方後円(方)墳の築造はみられず、有力な6・



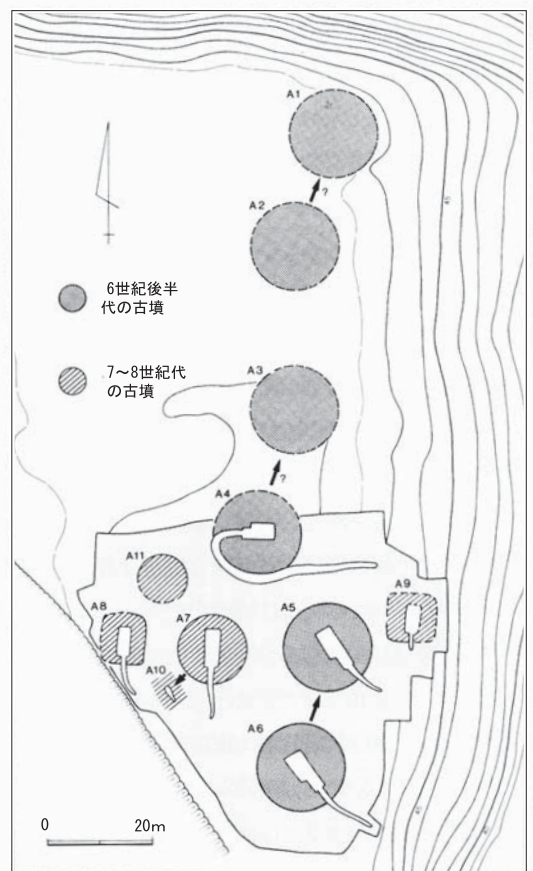
三方原古墳群全体図



墳丘規模の比較



宇藤坂A古墳群の変遷



宇藤坂A古墳群の構成と推移

図10 三方原古墳群における階層構造



7世紀の古墳も知られない。しかし、地域の中心といえる伊場遺跡群には7世紀後半段階の測評家が設けられ、のちの敷智郡家に連続するように、地域の拠点は確実に形成されている。地域拠点を担う在地勢力の性格の差が、有力な古墳を築くか否かの相違に関係している可能性があるだろう[鈴木2010]。

ここまで紹介してきた大型の円墳や方墳は、その築造時期がおおむね6世紀前半から7世紀前半代のものを中心としている。墳形こそ円形や方形であるが、墳丘構造や葺石などの外観、横穴式石室、石棺、副葬品といった諸特徴は6世紀代の前方後円墳と質的に大きな変化はない。こうした様相に対して、7世紀後半以降に構築された有力古墳については、各々の個性が際立っている事例が多い。その具体例に触れておこう(図11)。

東海地方では、7世紀後半に構築された横穴式石槨が伊勢の平田12号墳と伊豆の洞古墳に知られる。平田12号墳[竹内編1987]は直径9mほどの円墳で、磚積式石槨が構築されている。磚積式石槨は日本列島でも類例が極めて限定されるもので、その被葬者は、同類の埋葬施設がみられる大

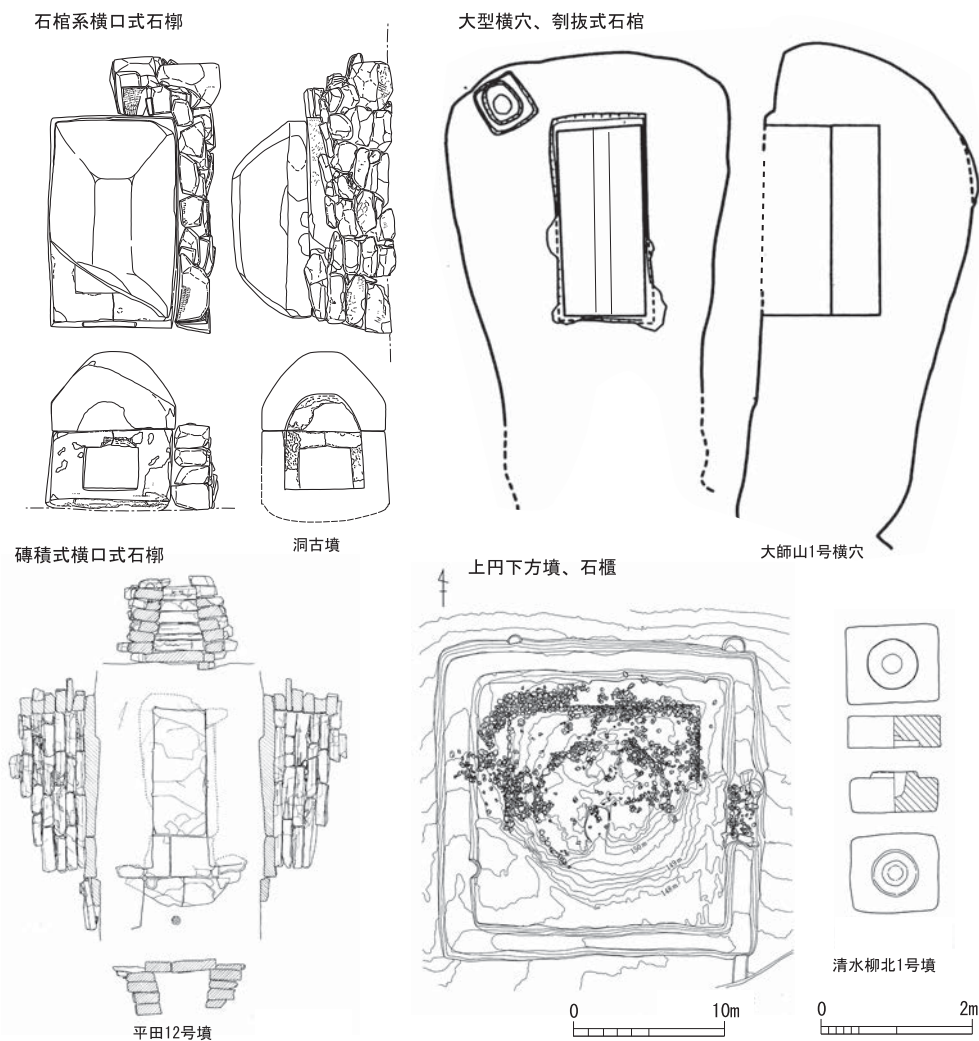


図11 東海地方における終末期古墳の諸例

和の宇陀地域に古墳を築いた集団と関係があった可能性が指摘できる。いっぽう、洞古墳<sup>(3)</sup>は、石棺系横口式石槨を採用したもので、巨大な刳拔式石槨の周りに、加工した凝灰岩を用いた石積みが構築されている。同様の埋葬施設の構造は、河内の羽曳野丘陵や近つ飛鳥近辺に集中するもので、洞古墳の被葬者と河内地域との関係がうかがえよう。洞古墳が構築される伊豆長岡地域には、全国的にみても最大級の横穴に、大型刳拔式石棺が入れられる大師山1号横穴〔平野・佐藤編1976〕や、8世紀以降に石櫃が集中的にみられる大北横穴群〔植松・佐藤編1981〕が構築されている。石櫃を用いること自体、東海地方では極めて局地的な現象であり、その採用にも畿内地域との関連を想定してよいだろう。

同様に構築時期は8世紀以降だが、東駿河には上円下方墳である清水柳北1号墳〔沼津市教育委員会1990〕がある。上円下方という特異な墳丘形態に加え、一辺1mをこえる巨大な石櫃を内部施設に採用するなど、遠隔地との交流網を駆使しえた有力な被葬者が想定できる。この古墳の被葬者は、盟主的首長に連なるような地域の中でも最高位の人物であったとみてよいだろう。これら、7世紀後半以降の特異な古墳や埋葬施設は、地域拠点の中心からやや離れた位置に構築されていることも注意が必要である。造墓地が有力者の本拠地から離れた地に選択された可能性も考慮すべきであるが、むしろ、7世紀後半代に進行する地域拠点の編成過程を、終末期古墳の分析から網羅的に復原しにくいことを示している。

以上の検討から明らかにしたように、東海地方における後・終末期古墳の様相は、1) 6世紀後半(TK43~TK209型式期)、2) 6世紀末~7世紀前半(飛鳥I期)、3) 7世紀後半以降(飛鳥II期以降)の3段階に分けて整理が可能である。1)の6世紀後半は、前方後円墳が構築される最終末期にあたる。前方後円墳の築造地域は限定的で、個性的な前方後円墳の墳形が採用されることなども特徴としてあげられる。埋葬施設には地域性が顕著な横穴式石室が採用されている。前方後円墳の構築が見られない地域には、大型方墳や円墳の構築がみられる。2)の6世紀末~7世紀前半は、前方後円墳の築造が地域的な跛行性をもちつつ停止し、方墳もしくは円墳のみが構築される段階である。方墳には一辺20mをこえるような大型化するものが知られるが、大型方墳が構築される地域は美濃や駿河など偏在性が著しい。埋葬施設には横穴式石室が引き続きみられ、大型石室も継続的に構築されている。3)の7世紀後半以降には、2)の段階から継続して円・方墳の構築がみられるが、墳丘、横穴式石室ともに縮小化が顕著である。同時に、横口式石槨墳や上円下方墳、石櫃の採用など特異な墳墓形態が局地的に展開することが特徴といえる。

## ②……………古代寺院の造営と地域社会

首長系譜論における比較研究の有効性が示された段階においては、都出比呂志がとりあげた京都府桂川流域の事例研究のように〔都出1988〕、古墳時代の首長系譜の延長上に古代寺院をあてはめる視点が含意されていた。都出の研究に触発された地域検討の中には、前方後円墳を中心とする前・中・後期の首長墓と大型方墳を中心とした終末期古墳に加え、古代寺院が関連づけられて提示されることもあった〔中井ほか1993, pp.44-45〕。しかし、その後の古墳時代研究においては、首長系譜論と古代寺院を結びつける観点は希薄になりつつある。古墳にかかわる情報が飛躍的に増加し、個



別事例の編年の位置づけや系譜の異同など、古墳相互の分析精度を高めることに研究の主眼が置かれ、通史的な研究視点が相対的に弱くなっていることがその主な要因といえるだろう。

古墳築造の動向からうかがえる首長系譜と古代寺院の造営を同一に取り扱うことができるかという作業前提の問題もある。のちの神郡の設置にみられるように、寺院の造営そのものが政策的に抑制された地域もあり、すべての地域を同一視点で比較することも困難である。発掘調査による情報の更新が顕著な古墳研究と違い、古代寺院にかかわる新出情報が少ないことも留意したい。古代瓦研究においては、新出資料に裏づけされた再検討や認識の深化の度合いが古墳研究と比べると緩やかであり、編年そのものの再検討も少ないといわざるをえない。

こうした留意点や問題点などをふまえ、本稿では地域拠点の推移を巨視的に俯瞰する上で、古墳時代首長系譜と古代寺院の対応関係について検討を加えておきたい。とくに7世紀後半代においては、評家や拠点集落などの情報に比べ、古代瓦やその出土地がかかわる情報は網羅的に知られており、首長系譜との対応関係からは興味深い事実が浮かび上がる。

図2～6には、東海各地の古墳時代における首長系譜の延長上に、古代寺院の構築状況を整理した。東海地方において古代寺院の造営が開始される時期は、7世紀中葉頃のこととみられる。尾張元興寺や美濃宮処寺廃寺などの出土瓦には、白鳳様式前期に並行するものが含まれ、遅くとも7世紀第3四半世紀の早い頃には寺院の造営が開始されていたことが知られる。また、続く白鳳様式中期から白鳳様式後期にかけては、東海地方各地において古代寺院の造営が爆発的に増加し、その数は100箇所近くに至る。

図に示した古代寺院は古代瓦の出土地を示したものであるため、本格的な伽藍を備えた寺院から、限定的な堂宇しかもたない簡易な寺院まで一律に取り上げている。古墳の規模に階層性を見出すように、寺院そのものの階層性についても注意を払う必要があるだろう。各地域において創建時期が古く、伽藍配置が明確で、用いられた瓦には周囲の寺院への系譜や技術的関連が追えるような有力な古代寺院を、本稿では「中核的寺院」と呼び、階層的に上位に位置づけておきたい。中核的寺院の認定は、指標を明確化する必要があるが、北伊勢の額田廃寺をはじめ、中伊勢の天花寺廃寺、西美濃の宮処寺廃寺、東美濃の弥勒寺、尾張の尾張元興寺<sup>(4)</sup>、西三河の北野廃寺、東三河の医王寺廃寺、中遠江の大宝院廃寺、中駿河の尾羽廃寺、東駿河の日吉廃寺などがあてはまる。これらの中核的寺院の造営主体は、古墳時代からの盟主的首長系譜とも関連性が高いという共通性もある<sup>(5)</sup>。

ここでは、中核的寺院と首長系譜との関連を示す典型例として、西三河の北野廃寺をとりあげておきたい。北野廃寺は矢作川中流域に構築された古代寺院で、四天王寺式の伽藍配置をもつ〔稲垣・齋藤編1991〕。高句麗系の特異な軒丸瓦を採用しており、その創建時期は白鳳様式中期、7世紀第3四半期頃と捉えられる。北野廃寺の瓦は令制下の郡の領域を超えて広域に拡散しており、地域内における影響力は絶大である。永井邦仁は、こうした北野廃寺の中心性を重視したうえで、北野廃寺の造営主体を7世紀前半代に矢作川流域を治めた参河国造の系譜を引く集団と想定している〔永井2011〕。同様に、東海地方では、尾張元興寺と尾張国造、弥勒寺と牟義都国造など、中核的寺院の造営主体に国造もしくはその系譜を引く集団が想定できる事例が多い点も特筆できるだろう。

中核的寺院の動向とともに、令制下の郡の範囲と古代寺院との対応についても注目しておきたい。東海地方においては、同一の郡域に単数もしくは2箇所程度の少数の寺院が築かれる場合と、複数

の寺院が築かれる場合があることが図から読み取れる。前者は「一郡一寺」的なあり方として注目されており、遠江や駿河がその典型的地域としてあげられる（図12）。また、先述の尾張の愛智郡域も同様のあり方を示しているといえる。こうした一郡一寺的なあり方をみせる地域は、後の郡家の周辺地に古代寺院が造営される場合が多く、郡司層が造営主体である郡家周辺寺院〔山中1994・2005、櫻井1987〕と評価できる。郡家周辺寺院には、先にみた中核的寺院が含まれる場合もあったとみてよい。

いっぽう、小地域内に数多くの寺院が築かれる地域は、東海地方でも数多く認められる。伊勢の

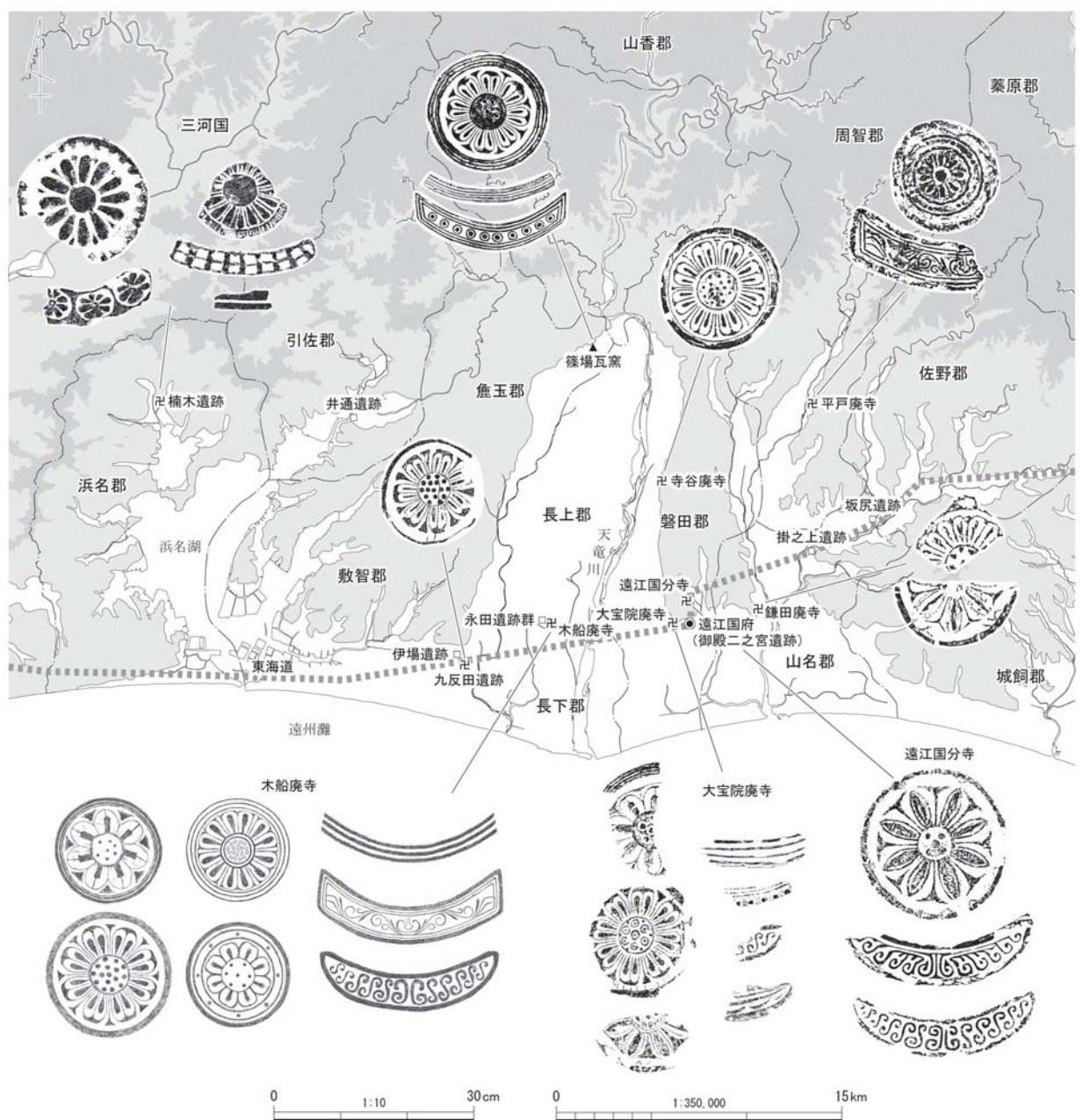


図12 遠江における古代寺院の分布

桑名郡、菟志郡、飯高郡、美濃の各務郡、加茂郡、尾張の丹羽郡、中島郡、海部郡、知多郡、三河の賀茂郡、宝飫郡などが、古代寺院密集域としてあげられるだろう。これらの郡域では中心勢力の統制が比較的緩やかで、地域内に割拠する中小勢力も規模は小さいながらも寺院を造営したことを示している。中核的寺院や郡家周辺寺院の他にも、多くの地域内勢力が古代寺院や寺院相当施設を造営したとみられ、西三河地域のように、本格的な伽藍を備えた寺院から、一堂程度の建物しか備えない施設に至るような階層差を内包しているとみてよいだろう [永井 2012]。

さらに、古代寺院の造営が低調な地域として南伊勢地域が注目できる。令制下の度会郡や多気郡、飯野郡などが相当し、神宮周辺における神郡の設置といった特殊な経緯を想定すべき事例である。また、神郡としての記録は見出せないものの、三河の八名郡域や遠江の周智郡域など寺院造営が低調な地域も各国の一宮との関係を考慮してもよいだろう。

### ③……………地域拠点の設定と境界の認識

有力古墳の推移からうかがえる古墳時代の首長系譜と古代寺院の関係から、7世紀における地域拠点がどのように推移したのか検討を加えてきた。ここで認識した地域単位と令制下の行政単位がどのように対応するのか触れておきたい。

まず、評制成立以前の地方区分をうかがうものとして、東海地方における国造の分布を瞥見しておきたい。『先代旧事本紀』巻第十「国造本紀」をはじめ、『古事記』、『日本書紀』などの記述から、東海地方には次のような国造が置かれたことが知られる [篠川 1996]。伊勢：伊勢国造，志摩：島津国造，美濃<sup>(7)</sup>：三野前国造（三野国造，本巢国造），三野後国造（牟義都国造），尾張：尾張国造，三河：参河国造，穂国造，遠江：遠淡海国造，久努国造，素賀国造，駿河：珠流河国造，盧原国造，伊豆：伊豆国造。これらの国造の勢力圏は、河川流域ごとに抽出できる小さな首長系譜とは異なり、令制下の「国」一つもしくは「国」を2～3分する程度の広範囲に対応する。国造制からうかがえる地域のまとまりは、6世紀末から7世紀前半の有力古墳の分布よりも、4・5世紀に盟主的首長墓が築かれる勢力域や、中核的寺院の造営地の方が調和的であるといえるだろう。国造制の廃止が天武12年～14年（683～685）に実施された国境策定事業の時期と重なる可能性が高いことを考慮すると、東海地方における国造の勢力圏は、7世紀中葉～後葉頃（白鳳様式前期から中期まで）に造営された中核的古代寺院の分布状況によって、最も明確に認識できる可能性がある。

郡の前身である評については、緩やかな人間集団のまとまりを示す前期評から、領域志向が強くなる後期評への移行が指摘されている。孝徳朝に設置されたとみられる前期評は立評氏族などの支配が及ぶ人間集団の個別把握であったことに対し、後期評は領域区分を前提とした人民把握を基本としており、後の郡との連続性も高いとされる [荒井 2009]。後期評の成立は、天武朝の国境策定事業と関連するものとみられ、地方における指標としては、サトの表記が「五十戸」から「里」への移り変わることによって認識可能である。「五十戸」から「里」の表記に置き換わる時期は、石神遺跡や藤原宮から出土した木簡から、681年～683年頃とされる [市 2010]。静岡県伊場遺跡（測評家）における紀年銘木簡からうかがえる様相もこの理解と矛盾はない [渡辺 2008]。

官人と技術者に全国を巡行させ、地域利害関係を調整しながら境界を定めた天武朝の国境策定事



業は、五畿七道制の骨子をつくった重要施策であり、地方においては国造制の廃止と領域志向が強い後期評の成立が促される大きな画期である。考古学的情報としては、評家の様相が明確になり、古代寺院の造営が隆盛化する時期にあたる。令制下の郡域との関連もうかがうことができる段階に相当するだろう。東海地方においても、岐阜県弥勒寺遺跡群（牟義都評家—武儀郡家、田中 2001）や静岡県伊場遺跡群（湖評家—敷智郡家、鈴木 2010）など、評家の成立から郡家への移行過程が良好に追える事例が知られている。

令制下の郡域については境界が設けられており、『六国史』や『延喜式』、および『和名類聚抄』の記載によって、その実態を知ることができる。図2~6の最下段には古墳や古代寺院が造られた地域と、令制下の郡との対応関係を示した。この区分は先述のとおり、おおむね7世紀後葉に成立した後期評の領域にも対応する部分が多いと捉えてよいだろう。この整理によって、郡（後期評）の範囲に有力古墳の造営がみられる地域と、みられない地域の差異があることが示せたといえる。古墳の造営が低調な地域は、山間部や半島先端部など、人口密度が希薄な箇所にも相当することもあるが、伊勢の員弁郡や朝明郡、三重郡、美濃の本巣郡、尾張の中島郡や知多郡、海部郡など、ある程度の農業生産力が想定できるにもかかわらず有力古墳の築造が少ない郡域がある点は看過できない。古墳時代の首長系譜を論じるにあたっては、自然集落を反映した郡域との対応関係は今後十分に考慮すべき課題である。大型古墳を築造した盟主的首長の影響域は、郡域とは必ずしも一致しない。古墳の築造地と自然集落の分布は明確に対応するものではなく、有力古墳の造営には小地域で完結するような在地社会内の関係だけでは読み取りにくい複雑な要因が働いていたといえる。

いっぽう、郡（後期評）の範囲と古代寺院との対応は比較的明確である。先述のとおり、一郡一寺的なあり方をみせる地域と、複数の古代寺院が同一郡域に築かれる地域がある。古代寺院は、寺院造営主体の本拠地に造られることを基本としており、古墳の築造地とは選地要因が異なる。後の郡司層がかかわった寺院は、必然的に郡家周辺寺院として把握できることを示している。

地域拠点の問題を考えるにあたっては、令制下における国府の設定環境にも注意を向ける必要がある。国府の成立過程についても諸説があるが、山中敏史が指摘するように国府は二つの画期を経て成立したと捉え [山中 1994]、国宰が地方に派遣される体制から、国司が常駐し実質的な地域支配を整える7世紀末から8世紀初頭頃に初期国府の成立を想定する説 [大橋 2011 など] を支持したい。この段階において、官道や条里地割の整備も進み、地域秩序も大きな転換を迎えたと想定できよう。

図13・14には、東海地方各地における国府が設置される位置を示し、その周辺の有力古墳や古代寺院、想定できる官道などを含めた景観を復元的に示した。この図の比較から明らかなように、東海地方において国府が設けられた地域は、4・5世紀に大型の前方後円（方）墳を中心とする盟主的首長墓が築かれるような地域拠点が選ばれていることが分かる。<sup>(8)</sup> また、国府の立地環境としては、交通の要衝や交通路の結節点が選択されている可能性が大きい。鈴鹿関や不破関との関連が高い伊勢や美濃の事例をはじめ、東海道（浜名湖南岸道）と二見道（浜名湖北岸道）の集束地が選択される三河や遠江、足柄・箱根越えの複数経路の結節点に国府がおかれた伊豆などがその典型例である。

こうした国府設定の経緯をふまえると、国府周辺に有力な古墳がみられない尾張についても、その特異性を強調するよりも、東海道と東山道の連結地であることを重視した立地環境であることに注目すべきであろう。本稿では深く立ち入ることができないが、7世紀末頃まで尾張は東山道に属して



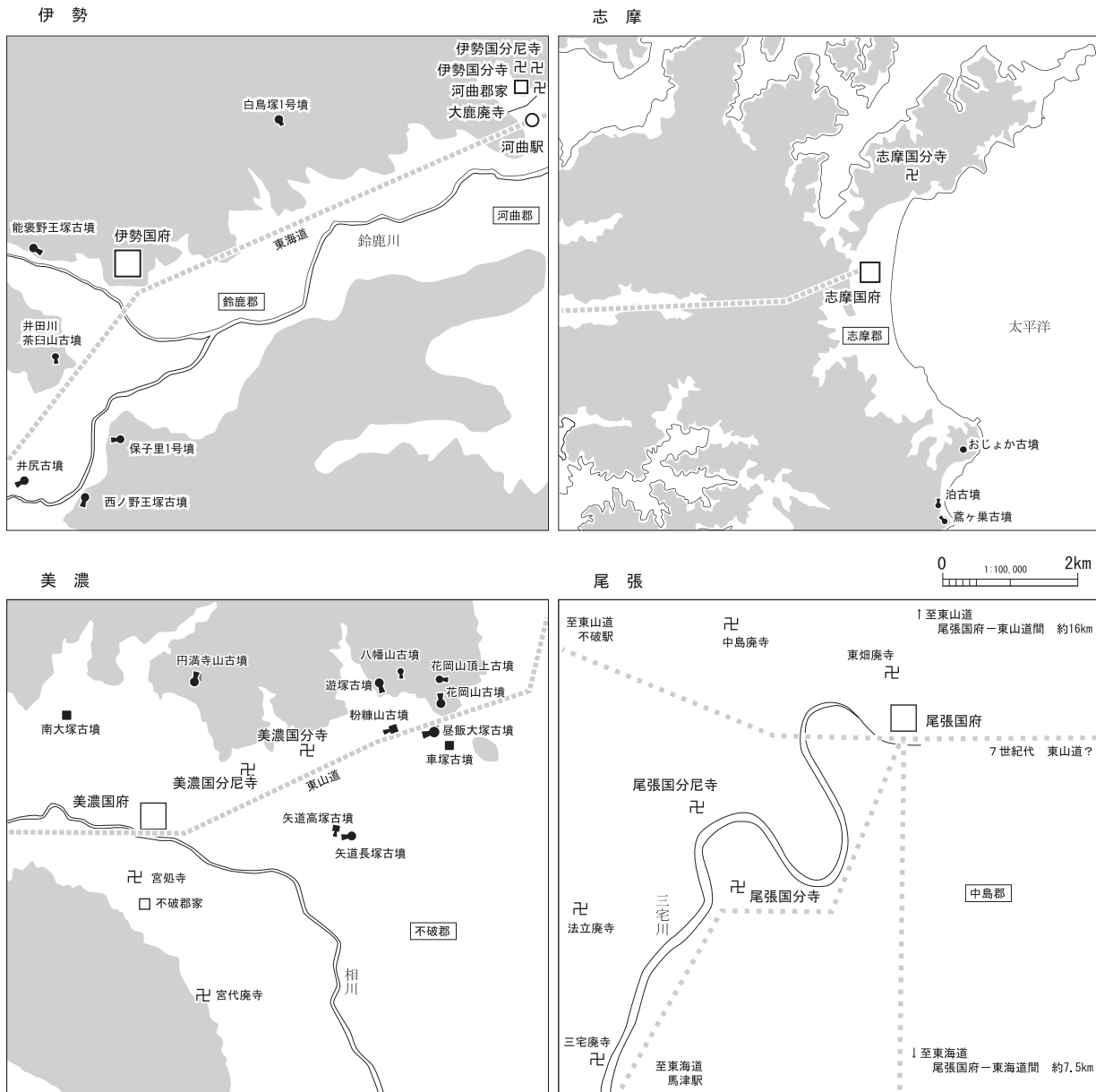


図13 国府とその周辺の景観(1) 伊勢～尾張

いたという説 [田中 1980] があり、美濃と尾張の間の連絡路にも数多くの経路が想定されている。尾張国府が7世紀までの東山道経路に沿って設定された可能性もある。8世紀にも引き続き中島郡域に国府が置かれているのは、東山道と東海道の双方に連絡可能な中間的位置を重視したためと解釈できるだろう。いずれにせよ、尾張における国府の設定については、伝統的な地域勢力の本拠地であるあゆち潟北岸部（名古屋台地）を避けている事実について、十分な検討を加える必要がある。

さいごに、7世紀後半における地域勢力の動態と、国境策定、国府の設置に至る地域の様相を象徴的に整理できる東駿河および伊豆の様相を紹介しておこう。静岡県東部地方にあたる駿河湾北東岸の地域は狩野川下流域という地形的な一体性とともに、弥生土器や土師器様式を共有する地域として統一的な文化圏が育まれている。6・7世紀の古墳にかんしても無袖横穴式石室が排他的に構築

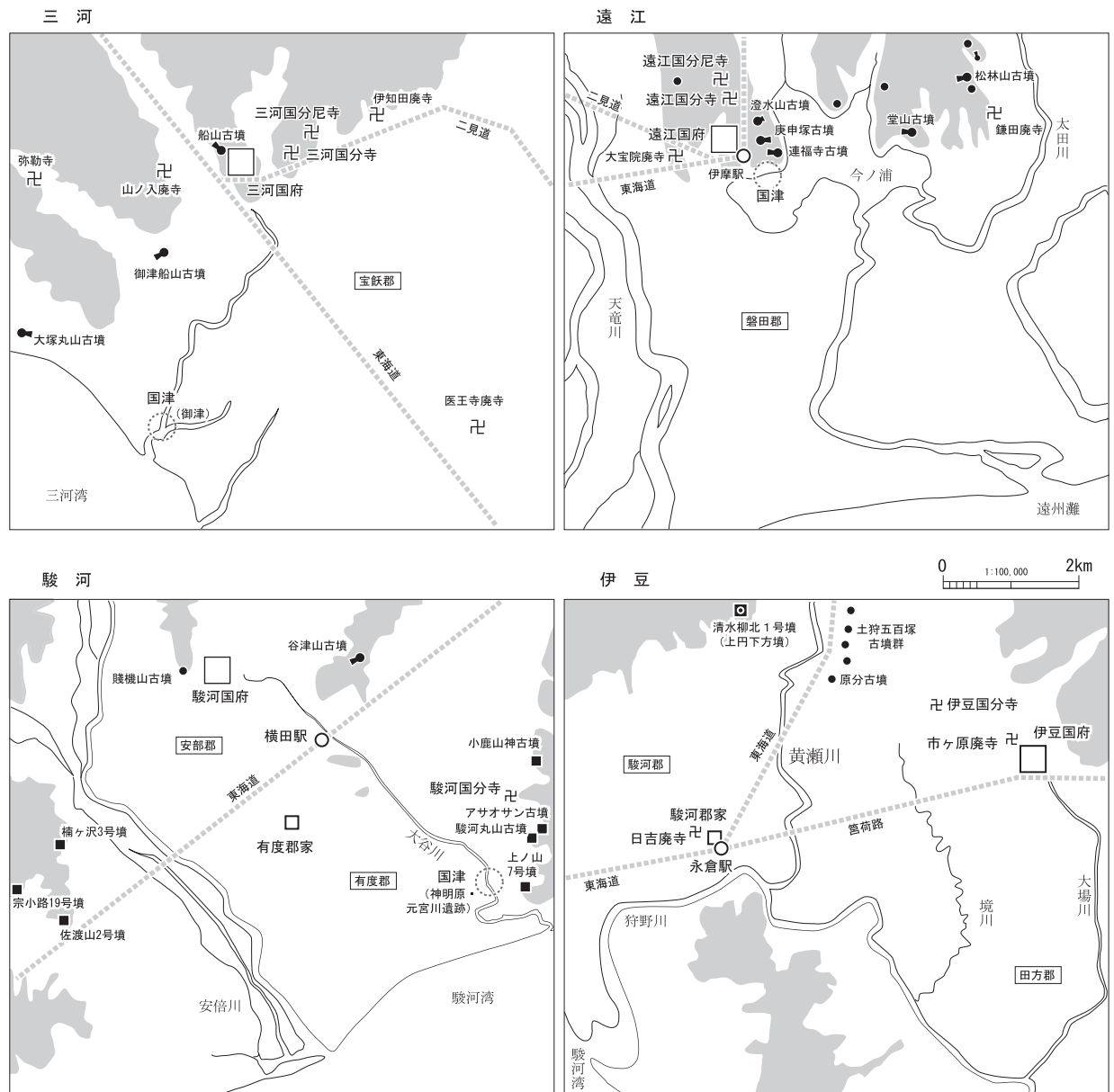


図14 国府の位置とその周辺の景観(2) 三河～伊豆

されること、凝灰岩製の石棺が集中的にみられること、装飾馬具や装飾大刀など7世紀代の瀟洒な副葬品が集中することなど高い共通性が看取できる。古代瓦についても山田寺式の軒丸瓦が駿河、伊豆の両地域を跨いで分布しており、同一系統の軒丸瓦は後の伊豆国分寺まで受け継がれている。この地域における7世紀代の古墳群としては、東駿河の土狩五百塚古墳群と、伊豆長岡地域の墳墓群が注目できる。前者は7世紀前半代、後者は7世紀後半代から8世紀に中心的な時期がある。土狩五百塚古墳群は、直径20m級の古墳に大型の無袖横穴式石室をもち、凝灰岩製石棺を内包している。装飾大刀や馬具を豊富に出土する点でも同時期の狩野川下流域の最有力古墳群といえるだろう。いっぽう、7世紀後半以降に墳墓の造営が隆盛化する伊豆長岡地域には、東海地方唯一の石棺

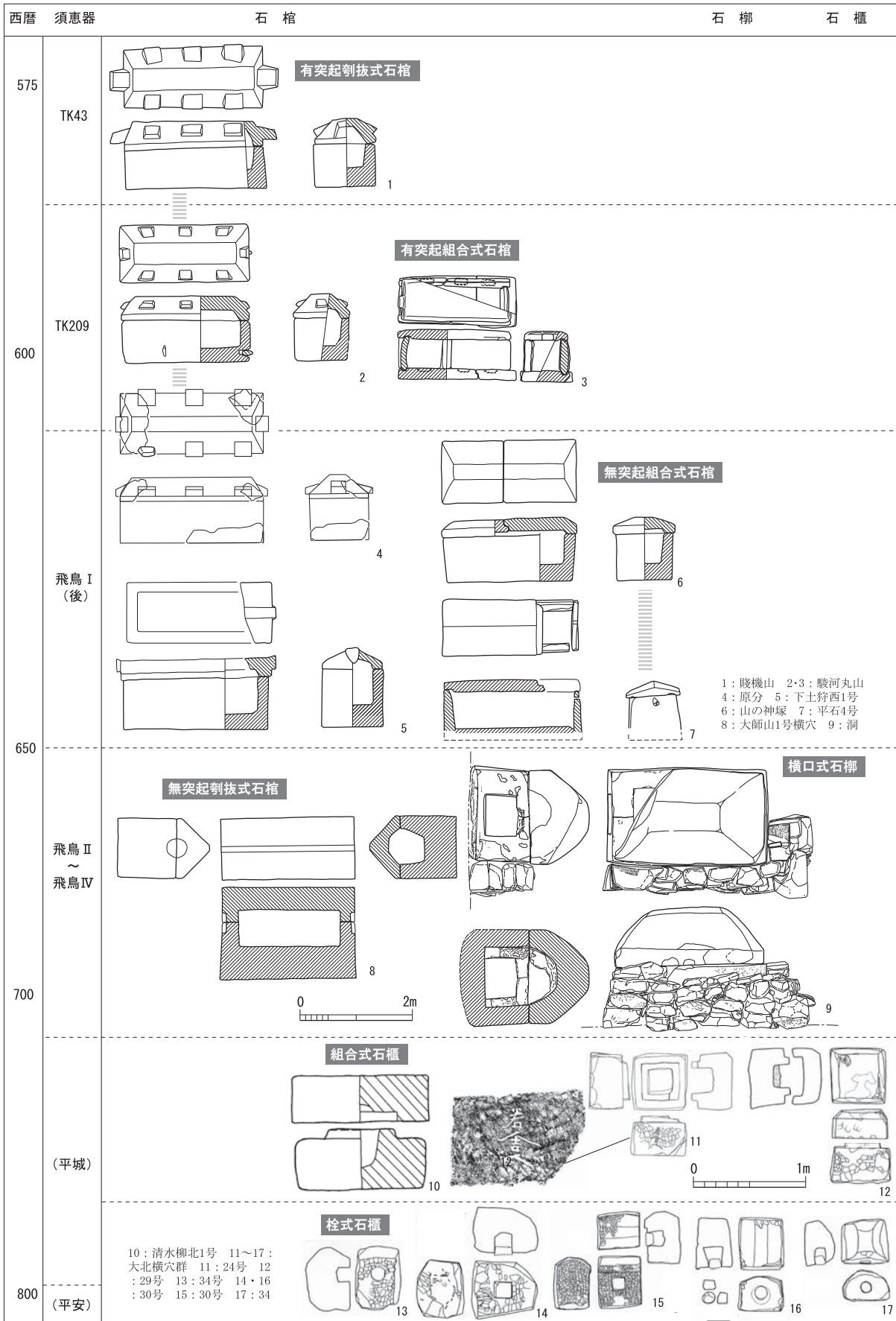


図15 伊豆凝灰岩製の棺・槨・櫃

系横口式石槨をもつ洞古墳をはじめ、玄室高2.8mを超える巨大墓室に大型の刳抜式家形石棺を備える大師山1号横穴を盟主とする大師山横穴群が築かれている。伊豆長岡地域における特異性は8世紀になっても引き継がれ、石櫃を埋葬施設とした大北横穴群も構築されている。

こうした狩野川下流域の古墳埋葬施設に共通する属性として、伊豆凝灰岩をもちいた棺・槨・櫃に注目したい。石棺、石槨、石櫃といった差異はあるものの、伊豆凝灰岩とされる石材の多くは駿河湾に面した江浦湾もしくはその近辺を産地としている。伊豆凝灰岩を用いる石棺は、6世紀後半代の中駿河（安部川流域）において採用された。その画期をなす賤機山古墳は、東海地方でも最上位級の副葬品を備えた最有力古墳で、畿内系の大型横穴式石室を採用するなど、地域の中での隔絶性が著しい。石棺は八突起を有するやや特異な形態であるが、近畿地方中枢部との交流のなかで導入されたものとみてよい。中駿河における家形石棺の採用は、駿河湾を跨ぐ、遠隔地流通網の実態を伝えている。6世紀末においても同じ中駿河に構築された駿河丸山古墳に伊豆凝灰岩製の家形石棺が採用されている。同種の石棺の系譜は、原分古墳など、土狩五百塚古墳群中の古墳に引き継がれ、地域における変容形態も顕著にみられるようになる。さらに7世紀後半には、洞古墳のように石棺系横口式石槨にも伊豆凝灰岩が選ばれ、類似した石棺の形態は大師山1号横穴といった大型横穴墓の埋葬施設としても採用されている。

伊豆凝灰岩を用いた埋葬施設は、8世紀に入ると清水柳北古墳といった上円下方墳に採用され、大北横穴群にみるように横穴墓にも用いられるようになる。大北24号横穴出土の石櫃に刻まれた「若舎人」の文字が示しているように、石櫃を埋葬施設に用いる集団は、王権中枢に出仕する舎人層やその系譜をひく集団が含まれていた可能性が高い。このように、6世紀後半から7・8世紀を通じた伊豆凝灰岩の利用は、広域交易の実態と外来の埋葬施設の採用、王権中枢との関係、さらには地域内での変容過程を伝えている。

令制下における国境は、こうした一体的な文化圏をもつ狩野川下流域を貫くように、策定されている。伊豆は駿河から分国された可能性が高く、その時期は『扶桑略記』に天武9年（680）のことと伝えられている。7世紀後葉という時期を捉えると、伊豆の分国は天武朝の国境策定事業と一連の施策であった可能性があるだろう。伊豆分国の背景には伊豆がもつ特殊性が注目されているが〔仁藤1996〕、考古資料としては先述のとおり、伊豆長岡地域における特異な終末期古墳の展開が最も注目できる。古墳の様相からは伊豆長岡地域に7世紀後半代の中心があったと目されるが、伊豆国府は、この地より北へ10kmほど離れた三島地域におかれ、後の伊豆国分寺も国府に近接して建立されている。墳墓を築く地域が、地域拠点から離れた所に設定された可能性も考えられるが、両者には宗光寺廃寺と市ヶ原廃寺といった、それぞれ別の古代寺院が認められるので、地域基盤は異なるとみてよいだろう。伊豆国府は、東海道（足柄路）と宮内路の結節点に近い位置が選ばれたとみられ、その位置決定には政策的な意図が強く働いたとみてよいだろう。駿河・伊豆国境についても、明確な地形的隔絶性を認めにくい小河川「境川」に重なり、両者で条里の方向が異なっている。こうした土地に残された履歴からも、強力な人為的施策によって、国境策定が断行された経緯を見出すことができる。





図16 東駿河・伊豆の古代景観

---

## 結語

以上、古墳の推移からみた古墳時代の首長系譜と、7世紀に建立された古代寺院、および令制下の地方行政区分との関係の整理を通じて、地域拠点の推移を概観した。検討の結果、古墳時代を通じて伝統的な地域の有力首長の勢力拠点が、そのまま令制下の地域拠点に引き継がれる場合と、律令体制の成立過程で新たに地域拠点が整備される場合があることが浮き彫りになった。後者の典型例は尾張の事例であり、志摩や伊豆においても伊勢や駿河からの分国の過程で政治拠点が創出された可能性が指摘できる。

古墳の造営から描き出せる有力首長の影響範囲と、令制下の古代地方行政区分については、概ね一致するケースが多いとみてよいが、古代官道の整備や領域設定ともかかわり、新たな地に人為的に設定される場合もあったとみられる。とくに尾張・三河間や駿河・伊豆間の国境は、丘陵や大河川など自然地形にとらわれておらず、領域設定にかかわる国家的な意思が国境画定の背景にあったとみてよい。尾張や伊豆における国府の位置についても、古代官道との利便性を優先的に捉えて定められた可能性が高い。

古墳時代の首長系譜と古代寺院の造営については、明確に対応する場合と必ずしも両者の関係が明らかになしえない場合があることを示した。前者の場合、建立時期が古く周囲の寺院造営にも影響力を発揮した中核的寺院に注目することによって、国造を中心とした7世紀における地域勢力の推移が比較的円滑に復元できる。いっぽう、後者の場合、古墳時代までの首長系譜と7世紀後半における地域勢力との間に断絶を認めることができよう。とくに、古墳時代後期の首長系譜が明確でない地域に多数の古代寺院が築かれる事例が伊勢や美濃、尾張、三河などに認められ、古墳の築造と古代寺院の造営を同列に扱えないことが容易に理解できる。もちろん、こうした各地域の分析においては、古墳の造営地と古代寺院の建立地の選び方が根本的に異なることを十分に認識しなくてはならない。古墳時代における人間集団の把握と造墓地の認識は、7世紀後半以降の領域概念と比べると大きく異なっていた可能性が高い。同一郡内に、複数の古代寺院の造営が認められる場合、近接する地域に想定できる寺院についても、その規模や堂宇の構成など、階層差を考慮する必要がある。

残された課題は多い。しかし、こうした問題点を認識しながらも、地方における地域認識として、古墳時代の首長系譜と、7世紀の古代寺院、つづく国府・郡家（評家）の設定にみる地方行政区分の相互比較が、地方勢力の推移をたどる上で有効であることは本稿で充分提示できたといえる。たんなる地域史の提示にとどまらないためにも、広域での比較検討を続けるとともに、分析対象の認識精度を深める努力を続ける必要があるだろう。

## 註

(1)——本稿では、7世紀以前の倭国王について、「推古天皇」など8世紀後半に定まった漢風諡号による天皇号を用いる。

(2)——南伊勢に構築される坂本1号墳も後期後半に築造された前方後方墳として看過できない。後期の前方後方墳という特異な墳形をもつこの古墳は、齋宮の隣接地に築造されている。齋宮制度の創出ともかかわる可能性があり、古墳の築造には、地域拠点の形成とは位相が異なる特別な背景を想定してもよいだろう。

(3)——筆者らが石槨を実測した。別途詳細報告を準備中である。

(4)——ただし、尾張元興寺については、瓦そのものの情報が広域には拡散していない。造営主体とみられる尾張氏が地域から大きく隔絶し、古代寺院の造営も独自性が発揮され続けた可能性がある。

(5)——三舟隆之が指摘するような古代寺院と有力古墳との断絶性は、6・7世紀の首長墓と古代寺院を直接的

に比較することに起因する可能性がある [三舟 2003]。むしろ視点を4・5世紀まで広げることによって、古墳と古代寺院との関連性を見出すことができる。

(6)——櫻井信也や山中敏史が「郡衙隣接寺院」「郡衙周辺寺院」などと呼んでいるものと同質の寺院のことを指す。

(7)——美濃における国造については、「国造本紀」が示す国造系譜と『古事記』、『日本書紀』が示す系譜が一致しない。ここでは、細かな検討ができないが、篠川賢が示す系譜の理解 [篠川 1996, pp. 432-443] に従っておく。

(8)——志摩や伊豆は国の大きさが相対的に小さく、それぞれ伊勢や駿河から分国されたことからうかがえるように、国府周辺にみられる前方後円墳は小さい。ただし、国内の他地域と比べれば、最も有力な古墳が構築される地であり、地域拠点として選択されるに相応しい地域といえる。

## 引用文献

- 荒井秀規 2009「領域区画としての国・評(郡)・里(郷)の成立」『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究所 pp.171-212
- 石野博信ほか 1985『季刊考古学』第10号(特集古墳の編年を総括する) 雄山閣
- 市 大樹 2010『飛鳥藤原木簡の研究』塙書房
- 稲垣晋也・斎藤嘉彦編 1991『北野廃寺』岡崎市教育委員会
- 稲垣晋也 1991「遺物 瓦類」『北野廃寺』岡崎市教育委員会 pp.125-137
- 稲垣晋也 1998「東海道古瓦の系譜(三)一遠江一」『皇學館大學史料編纂所報』第158号 pp.3-11
- 稲垣晋也 2000「東海道古瓦の系譜(四)一駿河・伊豆一」『皇學館大學史料編纂所報』第167号 pp.1-12
- 井鍋誉之編 2008『原分古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 岩原 剛編 2012『馬越長火塚古墳群』豊橋市教育委員会
- 植松章八・佐藤達雄編 1981『大北横穴群』伊豆長岡町教育委員会
- 大橋泰夫 2011「古代国府の成立をめぐる研究」『古代文化』第63巻第3号 pp.63-73
- 梶原義実 2012「尾張地域における古代寺院の動向」『尾張・三河の古墳と古代社会』同成社 pp.329-351
- 鎌田元一 2001『律令公民制度の研究』塙書房
- 菊池吉修 2008「伊豆の古墳とその特質」『東海の古墳風景』雄山閣 pp.100-108
- 木下 良 2009『事典 日本古代の道と駅』吉川弘文館
- 古代交通研究会編 2004『日本古代道路事典』八木書店
- 近藤義郎編 1992『前方後円墳集成 中部編』山川出版社
- 斎藤 忠 1981「石櫃及びミニ横穴について」『大北横穴群』伊豆長岡町教育委員会 pp.167-187
- 櫻井信也 1987「評・郡衙隣接寺院について」『尋源』第37号 大谷大学国史研究会
- 篠川 賢 1996『日本古代国造制の研究』吉川弘文館
- 鈴木一有 2000「三方原古墳群にみる群集墳の構造」『東海地方における群集墳の築造モデル』三河古墳研究会 pp.19-28
- 鈴木一有 2010「伊場遺跡の動態からみた評制の成立過程」『静岡県考古学研究』No.41・42 pp.265-278
- 鈴木一有編 1998『宇藤坂古墳群』(財)浜松市文化協会

- 鈴木敏中 2005「東駿河・伊豆の山田寺式(系)軒瓦」『古代瓦研究Ⅱ』奈良文化財研究所 pp.191-200
- 瀬川貴文 2012「東海・甲信」『古墳時代の考古学2 古墳の出現と展開の地域相』同成社 pp.166-177
- 田中 卓 1980「尾張国はもと東山道か」『史料』第26号 皇學館大學史料編纂所 pp.1-3
- 都出比呂志 1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第22号 大阪大学文学会 pp.1-16
- 滝沢 誠編 2010『小鹿山神古墳』静岡大学人文学部考古学研究室
- 竹内英昭 2008「寺院跡概要」『三重県史』資料編 考古2 三重県 pp.79-80
- 竹内英昭 2010「群集墳と横穴式石室の普及」『伊勢・伊賀の古墳と古代社会』同成社 pp.108-132
- 竹内英昭編 1987『平田古墳群』安濃町遺跡調査会
- 田中弘志 2001「弥勒寺東遺跡と武義郡衙」『美濃・飛騨の古墳とその社会』同成社 pp.194-218
- 東海埋蔵文化財研究会 1992『古代仏教東へ—寺と窯—』
- 中井正幸 2005『東海古墳文化の研究』雄山閣
- 中井正幸・鈴木一有 2011「東海」『講座日本の考古学7 古墳時代上』青木書店 pp.318-351
- 永井邦仁 2011「北野廃寺は三河国造の寺か」『考古学フォーラム』20 pp.35-43
- 永井邦仁 2012「三河における古代寺院の成立—西三河を中心に—」『尾張・三河の古墳と古代社会』同成社 pp.352-370
- 長瀬治義 2001「東濃地方の後期古墳文化」『美濃・飛騨の古墳とその社会』同成社 pp.92-119
- 長瀬治義 2002「方墳の領域—律令前夜的美濃と飛騨—」『美濃の考古学』第5号 pp.1-24
- 奈良国立博物館 1970『飛鳥白鳳の古瓦』東京美術
- 西宮秀紀 2011「三河国造の時代から青見評の時代へ」『考古学フォーラム』20 pp.2-13
- 仁藤敦史 1996「伊豆国の成立とその特殊性」『静岡県史研究』第12号 静岡県 pp.1-24
- 新田 剛 2004「伊勢国」『日本古代道路事典』八木書店 pp.50-57
- 沼津市教育委員会 1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書 その2』
- 八賀 晋 1973「地方寺院の成立と歴史的背景—美濃の川原寺式瓦の分布—」『考古学研究』第20巻第1号 pp.33-44
- 八賀 晋 2010「寺院」『愛知県史』資料編4 考古4 飛鳥～平安 愛知県史編さん委員会 pp.730-739
- 原秀三郎 1994「伊豆国分置と遠江・駿河・伊豆三国の成立」『静岡県史』通史編1 静岡県 pp.476-481
- 林 弘之 2001「東三河地域の古代二見道」『三河考古』第15号 pp.50-60
- 林 弘之 1996「国府を中心とした律令時代の三河国の復元」『三河考古』第9号 pp.97-104
- 平野吾郎 1990「遠江・駿河における屋瓦と寺院」『静岡県史研究』第6号 静岡県 pp.1-50
- 平野吾郎・佐藤達雄編 1976『大師山横穴群』静岡県教育委員会
- 藤岡謙二郎編 1978『古代日本の交通路Ⅰ』大明堂
- 北條猷示 2004「尾張国」『日本古代道路事典』八木書店 pp.61-64
- 三重県の古瓦刊行会 1996『三重県の古瓦』
- 三河古墳研究会 2000a『古墳の終末』
- 三河古墳研究会 2000b『東海地方における群集墳の築造モデル』
- 三舟隆之 2003『日本古代地方寺院の成立』吉川弘文館
- 三輪嘉六 1970「駿・豆古瓦系譜にみる一考察」『考古学雑誌』第55巻第4号 pp.49-63
- 藪下 浩ほか 1993『美濃の後期古墳』美濃古墳文化研究会
- 山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- 山中敏史 2005「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題」『地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』奈良文化財研究所 pp.1-48
- 山崎信二 1983「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』(同2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社 pp.3-37に再録)
- 横幕大祐 2002『願成寺西墳之越古墳群C・D・H～J 地点確認調査報告書』池田町教育委員会
- 渡辺晃宏 2008「伊場遺跡群出土木簡の再検討」『伊場遺跡総括編(文字資料・時代別総括)』浜松市教育委員会 pp.43-64
- 渡辺博人 2000『ふな塚古墳発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財調査センター
- 渡辺博人 2003『大牧1号墳発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財調査センター



---

図出典

---

図1～6・10・12～16 筆者作成

図7：[岩原編 2012]，[渡辺編 2000・2003] から引用，一部改変，加筆

図8：[長瀬 2002]，[滝沢編 2010] を参考に作成，各報告書から引用，一部改変

図9：[横幕 2002] から引用，一部改変，再構成

図11：[平野・佐藤編 1976]，[竹内編 1987]，[沼津市教育委員会 1990] から引用，再構成

(浜松市文化財課，国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2012年9月26日受付，2013年3月26日審査終了)

## Formation Process of Local Bases in the 7<sup>th</sup> Century : With a Focus on the Tokai Region

SUZUKI Kazunao

With a focus on the analysis of the Tokai Region, the transition of local bases in the 7<sup>th</sup> century was surveyed by classifying the relations among the genealogical record of chieftains in the Kofun period, as seen by the transition of prominent *kofun* (ancient burial mounds), old temples built in the late 7<sup>th</sup> century, and the local administrative divisions at that time, such as provinces, counties, and those villages consisting of 50 households. It is fair to say that the areas under the influence of a prominent social class, which can be imagined from the construction of *kofun* and old temples, mostly conform to the local administrative divisions established under the *ritsuryo* codes of that time; however, some areas show a partial inconsistency, which indicates the circumstances of local reorganization in the 7<sup>th</sup> century.

The area over which the tomb of a leading chieftain exerted influence, as shown by large-scale keyhole-shaped *kofun*, and the distribution of core temples built from the mid to late 7<sup>th</sup> century show a relatively satisfactory correspondence to the provinces governed by *kuni no miyatsuko* (regional administrators); however, they do not exactly match with the provinces and counties stipulated under the *ritsuryo* codes. In addition, the *kofun* built during the terminal stage of the Kofun period in the 7<sup>th</sup> century showed striking local differences and individuality, which demonstrated the difficulty in employing them as materials to comprehensively reconstruct the level of local organization.

Organization into the administrative divisions under the *ritsuryo* codes was associated with development of government roads and the establishment of domains at that time, and gradual progress was made throughout the late 7<sup>th</sup> century. A significant landmark was the establishment of the early counties during the rule of Emperor Kotoku, and their transition to the late counties linked with a project to fix the provincial borders, which was enforced from 683 to 685; it can be assumed that this project rejected much of the local organization established in the Kofun period, and that the reorganization of areas by domain was promoted on a large scale.

Key words: keyhole-shaped *kofun*, *kofun* at the terminal stage, old temples, Kori no Miyake (county office), provincial capital

---